

# ライマン雑記(4)

副見 恭子<sup>1)</sup>

## 平河町

来日して先ず住み着いたのが増上寺開拓使お雇い外国人宿舎。翌年明治7年11月末に浄運院へ転居。滞日7年間の3回目、そして最後の住居は、東京麴町平河町5丁目17番地だった。今回も、移転日の確証はないが、明治9年12月15日としたのは、コック幸太郎の書いた家計簿の御陰である。家計簿を読んでいくと「12月15日、浄運院家賃15円50銭」は、月末の支払いを引越の際に終えたと判断し、「ひきうつりの荷物3つ、1式10円」は引越しの経費と思われる。飛んで17日になると、「掃除人足2人(16日分)40銭、くぎ7銭、ごみとり3つ30銭2厘、こびしゃく2本3銭6厘」とあり、新居に移った感じで、締め括りは12月30日、「地券書替印税1円25銭1厘」。確実に、ライマン及びライマン一家は、平河町に落ち着いたことが解る。

明治8年10月23日官許出版「東京区分絵図全」によると、HIRAKAWA CHO は平川町で、幸太郎は、「平川町ヨリ上野マデ往返人力車(安達)2銭」と記し、精養軒の角パン届けの領収書も、平川町5丁目ライマン様で「平川町」が断然マジョリティを占めているかと思うと、次第に平河町が優勢になるが、川・河はライマンが離日するまで統一されていない。それで、明治10年1月17日、幸太郎が「明治12年12月分区入費、平河町17番地17銭6厘」と書いているのを良しとし、「河」を選ぶことに決めた。

ライマンの開拓使との契約は、明治8年12月6日で終わり、短期間雇い継がれたが、彼のフィールドブックによると、明治9年2月24日、内務省勅業寮へ赴き、大鳥圭介立会いの下、内務大丞河瀬秀治と契約書のサインを交している。黒田清隆はライマンの開拓使契約更新を否定したとか、内務卿大久保利通は内務省ライマン雇用にネガティブな差出口をしたとか、ライマンは無給で北海道地図を完成しなければならなかったとかの真否説で、解雇後、打ちのめされたライマンの姿を想像しがちである

が、いやいや全くそれと反対で、バイタリティに満ち溢れたライマンの姿が、明治9年のフィールドブックを見ると浮上る。当時ライマンは朝食前自宅で、6時から8時まで2時間仕事をやり、それから朝食。朝食後、開拓使へ出掛け、9時から4時半まで、時には5時半頃まで仕事をし、忙しくなると、土曜日もこのスケジュールで押し通し、現代版のワオカホリック。働き蜂も舌を巻く働きぶりである。

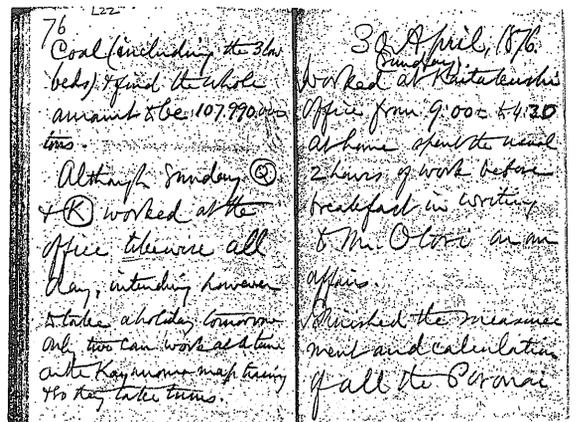
4月30日 1876 日曜日(第1図)

開拓使オフィスで、9時から4時半まで仕事をした。自宅では日課の朝食前の2時間を、ミスター大鳥へ仕事に関する手紙をしたためるのに費やした。ポロナイ炭鉱(第三紀層を含む)も見積りを終了した。総計は107,990,000トンとみなす。明日は日曜日で休みであるが、QとKが一日中働くはず。彼等は第1潤の地図の写しを二人一組で代わりばんこにやる。

5月7日 1876 日曜日

6時から8時まで、そして正午までもう1時間ばかり仕事をした。石炭を測定し「日本蝦夷地質要略之図」の各種色彩の下書きを直したり、写したりした。

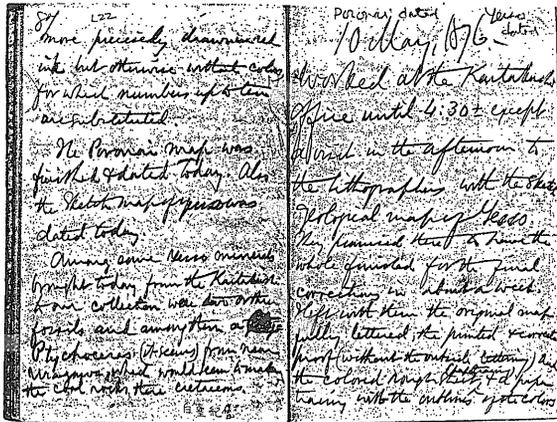
(QとKは、それぞれ桑田知明、賀田貞一のこと。筆者注)



第1図 平河町、フィールドブック L22, p.76

1) マサチューセッツ大学顧問: 8 Eaton Court, Amherst, MA 01002, U. S. A.

キーワード: ライマン, 平河町



第2図 平河町，フィールドブック L22, p. 87

5月10日 1876 この日は特に興味深い(第2図)。

開拓使で4時半まで仕事をした。その間午後「日本蝦夷地質之図」8枚を持って、リトグラファー(彫刻会社一筆者注)を訪れた。会社は一週間以内に最後の校正を終わると受けあった。全部字を入れたオリジナルマップ、印刷したマップ、校正刷(封筒に何も記入せず、着色した下書き、赤インクで輪郭をつけ、1から12の数字で色を表した写し)、以上を会社に預けてきた。

ポロナイの地図完成。今日の日付を入れた。又「日本蝦夷地質要略之図」にも今日の日付をいれた。

今日開拓使から送られて来た蝦夷鉱物の中に、3つの化石があった。その中の浦河の近くから Ptychoceras(と思う)は、石炭層を白亜紀層にするのではなからうか？

3年間の苦勞が実を結び、次から次へと北海道の地図が仕上がり、日付けを入れ、額に収める輝かしい日々であった。この記録は、ライマンが化石に関する知識なく、地質調査で化石を疎かにしたと批評された非をはっきり裏書きする好材料でもある。

6月5日に、ライマンが越後石油調査に立つ前、道中ご無事にの訪問を受けるが、訪問者の中にナウマン・ゴッドfrey(J. G. H. Godfrey, 工部省勤務のイギリス人一筆者注)の名が見られる。

越後の石油調査を終えて江戸に戻ってきたのが11月9日。余程嬉しかったのか、大きく「帰宅、浄運院、9時48分」とし、

天候まだ良し。数名の訪問を受けた(ジネラル大鳥, R. 山内, C. 野村)。午後ブーケマ家訪問。夜になる前に荷物到着。又Gと別当, 馬, クリーも帰る。

ようやく帰宅したライマンの喜びと安堵を感じる。そ  
1990年12月号

の後休息が続き、弟子達が越後から帰った翌日の11月25日、「Yのところへ。Yと一緒に平河町17番地の売家を見てきた」と、たった二行だが見逃がせぬニュースである。ここでYとは山内徳三郎のことである。

明治9年の末から10年の始めの書簡コピー綴りは、大部分ビジネスレターとレポート、そして私信は不明瞭な箇所が多いので、フィールドブックに頼る外無かった。「平河町」を仕上げたものの、どうしても物ならず、もう一度コピー綴りに目を通してみようと決断した結果、幸運をつかんだ。1877年1月11日付、6ページの長いメリーへの手紙の1-3ページは、どうも、クリスマスと新年の出来事の詳細な描写らしい。ところが4ページめに「この家を申し分ない安値で買うことに成功しました」とあるではないか。続いて「サンボーンの誕生日、12月15日にうりました」とある。やはり12月15日だったのだ。思わず心のなかで快哉を叫んだ。サンボーンは、ハーヴァード大学時代からの親友で、二人の友情はライマンの死まで続いた。

ここへ移って以来、修理や掃除するいろんな職人達や多数の日本人の知人の訪問に絶えず中断され、悩まされています。家も土地も、ばかに広すぎたなあと感じ、又2部屋で満足すれば良かったと思い始めています。

ここでライマンは、広々とした家と土地につきメリーに説明している。土地は1エーカー約34047平方メートル、大都会の中央に位置する場所としては広大である。敷地は土地の6分の1で、これも広いが、日本の家は大体一階建てであるがと述べ、でも独身の自分には大きすぎると言い、すぐしかし使用人と弟子二人、賀田・島田純一、それに使用人の家族全部で13人か14人か15人の大世帯だからと、広い家を買った理由を正当化しているに違いない。5ページから少しわかりやすくなり、「この家はお屋敷だった。つまり、旗本の家で30年前に建てられた。となりまで火がきた火事の名残があり、年を経た江戸の大変古い家だ」。又「本館以外に長屋があって、そこに賀田と島田が住むことになっている」。ここから又はっきりして、

それ以外に、門番の小さな家と別当と馬の同じ様な家があります。門番は年とっていて、かみさんがいませんが、十代の娘がいます。別当には、1、2年前ブーケマ夫人の乳母だった良いかみさんがいます。

又解説に戻る。「本館は、居間・書斎・応接間・寝室、それに2、3の小さな部屋があり、その1つは、安達(安達仁造のこと一筆者注)が住むことになろう」と書き、

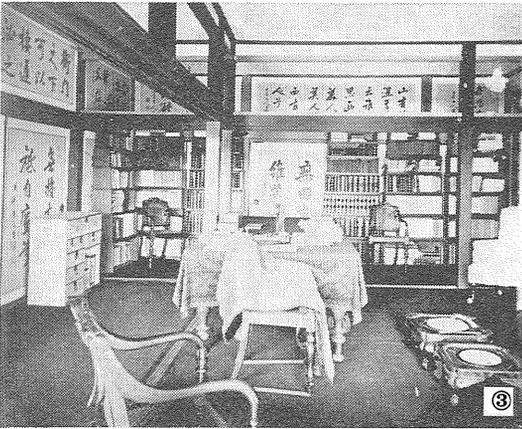
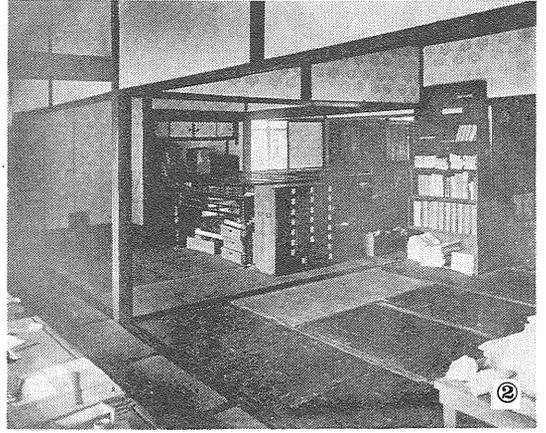


写真 ライマンの平河町の住居

①居間, ②オフィス, ③書斎, ④書斎, ⑤食堂

ので安かったと思う。日本との条約で、外国人は土地を買えないので、私の一番弟子の山内徳三郎が所有者になっている。又 500 ドルで、眺めの良い二階建てを建てる、とライマンの夢のプランは、まだまだ続いているが、解説は全く不可能となった。

離日の年、明治13年6月8日、平河町で大火があった。ライマン家助人名録が保存されていて、目を通すととても印象深い(第3, 4図)。駆けつけた順であろうか? 最初の二人は「山内氏より2人」、弟子の山内徳三郎の名は後で出てくるので、山内堤雲か、未だ私には解明できぬ。R. Yamauchi の使用人2人なのであろうか? 安達仁造・前田精明、少し遅れて稲垣徹之進・杉浦譲三・西山正吾と弟子達がかけてつけた。「永吾方久次郎」の名があり、ライマンが鉛筆で Kiujiro brother, Mr Yamagiwa と右側に記しているの、山際永三氏(第4図右下にある印刷では読み取りにくいであろう永吾の孫)ヘリストのコピーをお送りしたら、お返事をいただいた

客用の部屋が1つ、今小さなキッチンとして使用している部屋は、酪農室にし、牛を買いたい希望を抱いている。北側はキッチンと食堂、2人の使用人の各室、それに井戸室とベランダがある。近所には、ゴッドフレイヤブーケマが住んでいるらしい。「アメリカを除き殆どの外国公使館があるので、帰国する時売るのに便利であろう。家と土地で2,300ドルで購入。売値が3,000ドルだった



る。

明治14年5月、8年ぶりにノースハンプトンに戻り、同国人・アメリカ人につき、「押し強くエネルギーで、激しく利己的なサクソン民族は、日本人の様な従順、思いやりあり、献身的で親しみやすい人々と比べ、優しさと感じの良さが劣っている<sup>1)</sup>」と述べている。その時、ライマンは目の前に炎を見、かけつける人々の足音を聞き、6月8日の大火を思いだし、江戸の人々の人情の美しさを再認識したのではなかろうか？。

- 1) Fujita Fumiko "Boys, be ambitious!": American pioneers on the Japanese frontier, 1871-1882, University Microfilms International, 1988, p.223.

---

FUKUMI Yasuko (1990): A note on Lyman (4).

---

<受付: 1990年6月18日>

---

新刊紹介

---

「地球環境の変化に関わる堆積学的諸問題」

堆積学研究会では、昨年11月に行われたシンポジウムをもとに、会報32号特集「地球環境の変化に関わる堆積学的諸問題」を4月に刊行致しました。掲載される論文は、●隠岐海嶺堆積物に見られる明・暗リズム(松本良ほか) ●古生態と古環境解析—要旨—(鎮西清高) ●非定常的堆積現象研究の意義と方法(志岐常正) ●女川層にみられる堆積リズムと環境変動(多田隆治) ●化学組成から見た層状チャートの堆積メカニズムと周期性(渡部芳夫) ●湖沼堆積物の粒度組成の変動と過去の侵食環境(柏谷健二) ●琵琶湖における乱堆積現象と古環境変遷(公文富士夫ほか) ●汽水湖沼の湖底堆積物に記録された完新世の環境変化(鹿島 薫) ●縞状堆積物のフラクタル解析(川上紳一ほか) ●<sup>14</sup>C年代測定と環境変化解明の諸問題(中村俊夫ほか) ●日本の中生代以降の地層に認められる海進・海退現象(伊藤 慎ほか) ●白亜紀セノマニアン〜チューロニアンの海水準変動(安藤寿男) ●九州中軸帯白亜系の堆積過程ならびに堆積・造構造環境(坂井

卓ほか) ●前弧深海成砕屑物の堆積パターンとその制御機構(草場 敬ほか) ●臨海扇状地の海水準規制(武藤鉄司) ●西太平洋で見られた炭酸塩補償深海底の変動(山本 聡) ●中部太平洋海底堆積物中の金属元素の分布(三田直樹ほか) ●堆積物における H<sub>2</sub>S の挙動(鈴木德行) ●日本海溝セジメント・トラップ中の微細鉱物と堆積環境(青木三郎ほか) ●西南日本太平洋側の陸棚～斜面域の表層堆積物(池原 研) ●鮮新世後期の扇状地—網状河川堆積相: 本州西端部の土井ヶ浜層(水野篤行ほか) ●潮下帯堆積物の特徴とその識別法(牧野泰彦) ●古東京湾の沿岸砂州堆積物から推定した古水深と離岸距離(岡崎浩子ほか) の23論文です。B5版2段組140頁で、非会員価格は3,000円です。希望者は下記宛てお申込み下さい。

〒812 福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学理学部地球惑星科学教室内 堆積学研究会事務局 坂井 卓宛 Tel. 092-641-1101 (内線4304), Fax 092-632-2736, 631-4233 堆積学研究会事務局(坂井 卓)